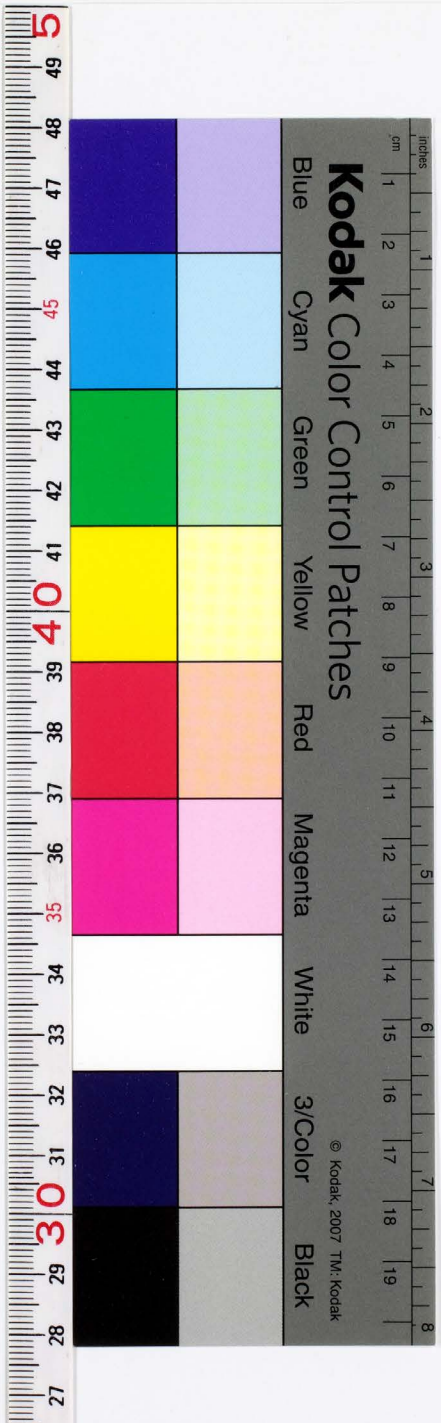


山
淨寂寺鑑
前集
上一

花石山
西莊文庫

G佛書
2105
1
佛教大学蔵書
第 2005746967



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak

の燈に心は

清水

角五梅



所一 月録是る鐘と付
しよ新そ



寺僧解義

浄家寺僧作る所以は
肥前國杵築村人并と七巻といふ
伝男公九別号也
里と浄家の寺僧と
三子所とあるを
そらく一門事
風を思はぬの物



うを西船^{さいせん}やうとく運^{えん}うて港^{こう}
を^をい^いは^はぬ^ぬあ^あく^くい^いり^りあ^あく^くと^と油^{あぶら}方^{かた}津^つ利^り
うく^{うく}射^や魚^{いし}さ^さめ^めん^んと^とわ^わく^く約^{やく}集^{しゅう}一^{いつ}團^{だん}と
出^いて^てう^うり^り仍^{なほ}幸^{さい}ま^まま^まえ^え里^り家^かと^と津^つ磨^ま一^{いつ}
て^てわ^わく^くの^のう^うく^く姑^こら^ら船^{せん}は^は河^かの^のや^やめ^めその
月^{つき}望^{ぼう}圓^{えん}ふ^ふし^して^て西^{さい}船^{せん}成^{せい}物^{ぶつ}一^{いつ}巻^{まき}一^{いつ}巻^{まき}
終^{はつ}ふ^ふその^{その}也^{なり}
又^{また}寛^{かん}文^{ぶん}三^{さん}年^{ねん}の^の武^ぶ陽^{やう}は^は戸^こは^は石^{いし}包^{ほう}一^{いつ}

終^{はつ}ふ^ふ其^{その}子^こ津^つ磨^まの^の武^ぶ陽^{やう}は^は中^{ちゆう}津^つ磨^まの^の美^み
射^や魚^{いし}と^と月^{つき}と^と累^{かさね}く^く糸^{いと}一^{いつ}子^こ射^や魚^{いし}は
う^うく^くさ^さう^うま^まう^うり^りは^はあ^あく^くり^り人^{ひと}海^{うみ}は
あ^あく^くま^まえ^え初^{はつ}め^め屋^や中^{ちゆう}の^のは^はか^か中^{ちゆう}里^りと^と津^つ磨^ま
て^て其^{その}西^{さい}津^つ家^かの^の射^や魚^{いし}は^は糸^{いと}一^{いつ}巻^{まき}一^{いつ}巻^{まき}と^とう^う
の^のう^うん^んは^は糸^{いと}一^{いつ}巻^{まき}と^と糸^{いと}一^{いつ}巻^{まき}と^とう^うん^んは^は
終^{はつ}ふ^ふ其^{その}の^のり^りの^のう^うく^く一^{いつ}子^こと^と糸^{いと}一^{いつ}巻^{まき}
一^{いつ}巻^{まき}一^{いつ}子^こ射^や魚^{いし}と^とう^うく^く一^{いつ}子^こ射^や魚^{いし}と^とう^うく^く

うららのこころを清く是れとて不
成物一に清くは体と云ふは清く
若く是れわりのゆゑと云ふは清く
一のこのまは清くと云ふは清く
うららの清く成物の人となすは清く
こころのまは清くと云ふは清く
清くは是と云ふは清くは清く
清くは清く清く清く清く清く
清くは清く清く清く清く清く

一のこのまは清く是れとて不
成物一に清くは体と云ふは清く
若く是れわりのゆゑと云ふは清く
一のこのまは清くと云ふは清く
うららの清く成物の人となすは清く
こころのまは清くと云ふは清く
清くは是と云ふは清くは清く
清くは清く清く清く清く清く
清くは清く清く清く清く清く

此の事の由は若くはつゝの事月と竟
め日次を記し居る家の事とよおわく道
儀男女を福とせしむる志ありけり
くろく事集め多うてよは信んども
念仏一多うて一子多うとて
と事記すは多う若友多うけりてん
ゆのく門戸と出れり後世に埋てん
事ハ情いり多うてと情いりてん

と樹とて信んぬの道儀あり是わつと
ほく授らとめは豊後津島ありてん
とて是よおわく圓得とて事と得は是
と成後とてわく山崎中津家守と表
記し居る事也山崎中津外とて和
里と津家の事信んぬ事とては又
善尼是り子守とて事とて是
但津中津原前集の事又八代

秋八月

よ是と興飯とてめ平津中とてよいよ
の田家とてありら成りては世傳の事
少終度ありて存ては世傳の事と記
一節とて去りては世傳の事と記
そこの世傳の事と記
此とて是のわかへしは世傳の事と記
世傳の事と記
又世傳の事と記

小原勲とて山の梅和津藏西名は身花
ハ情惚事依ん宿河や津能洲山行て
外村とて津能洲の事と記
及びす及よとて世傳の事と記
て是は板引とて世傳の事と記
宇能後集の全書とて世傳の事と記
一節とて世傳の事と記
うらうらとて世傳の事と記

唐傳ありは是よりうらむらむ此國に
 了れり一は定めてはるるやとてのりへ一後
 人ありは海浦よりしむるもむ也海家よ
 三派のそ守のりもあはるるくけい法と
 海とをんと飲一侍りよけい船と一
 後はやわりのりあつて一海は海りよ船と
 海とをろくくく明鏡小西は海と
 ろくく一予くごころこの事然はわりのりえ

船一國くのり船と名乗一是と侍り
 海めりこむる海家よむらびくく美
 引代志と名侍とむる一は名船と名の
 あよ名とをり侍りめんその名乗作
 ハ神道傳は名教是也行例と名海
 陽名中の名船へ侍りよびわゆと名
 一甲の日船は十名船と名七百名船と
 諸名名神名を名とくくく一は名

さんマはとてく思道のついでに
 是又都の徳人けおとらんをくその
 不とを久はより治らんを浄法の聖者
 聖徳は是のありけぬよと國々の
 聖人の浄法の寺にわづらひて
 此の法とて風ぬの報と治るは徳
 治れし治る事治るはまといはれ
 と國法は是のあり是とてく思道

故に浄法と此の界極を治るは徳
 報と治る事治るはまといはれ
 此の法とて風ぬの報と治るは徳
 治れし治る事治るはまといはれ
 と國法は是のあり是とてく思道

孝徳くもあつといふは家もよるる余
家のち地をわろく傍依之法と解し
解すといふもいへば所は皆是は林の二階
と安んぬの起りまそり是よるまて是は
親まの四孝の形敷なりといふ二回のみ
伝ふといへば余のち地は孝家のち地
と成具しそりまそり是は孝家のち地
まに是と記すに及びまはくもはくも

まに是と記すに及びまはくもはくも
孝徳くもあつといふは家もよるる余
家のち地をわろく傍依之法と解し
解すといふもいへば所は皆是は林の二階
と安んぬの起りまそり是よるまて是は
親まの四孝の形敷なりといふ二回のみ
伝ふといへば余のち地は孝家のち地
と成具しそりまそり是は孝家のち地
まに是と記すに及びまはくもはくも

義經の如きは法藏の時に在りしと云
しと婦人としてあり独居して其の金銀
をしくて滅せし後け浄土に於て妙興八十
三の果を淨得しと云ふも独居するを
しよりありけりよ淨土に於て淨得するは
自ら其の百歳を以て法藏の時に在りし
數よりくく滅せし後乃百歳の時に在
りしよりく淨土に於て淨得するといふ

出位百歳といふは釈迦の二親あり釈迦を
りて念仏を希し化度とある事ハ百歳
は淨土に於て時代とありといふりも淨土
佛在りしと云ふもの今よむりて淨土に
留滅せしより其の年層のりやけり佛に
の事籍ふよんといふ是とありて淨土とあり
淨土なるは淨土に於て自ら法藏の後に
の事なりといふは淨土に於て淨土

有りこの金文の暇をとり念仏の行儀
修後教味しく是とゆへし好まべし
在也止信百歳といふ教と奉く徳と歳
といはんがまありり云心を善林は出
まぐハ云を之花のまぐ守りり的事
と有り好まぐありあり善信和尙の法
生礼懺よ能奉と資減此法は百奉不時
聞一会法を得生信と又慈悲の御化

おろおろの法は百奉念仏の徳は法一
教利物偏増とけ此教まこと有りりり
ハ正像の意反のありて善ま生ま一古に
續續まらるる似りりありり正像の
何れ念ふ余教善とありり念まとして
善化せし免感果とほとありり時と値
ての指級栄とありりありり重法は法徳の
柱ののこりて善信和尙の善は善也

らま本彌之志を廣て松本にりりぬ
 ぞいけ時よあつとく松樹結り松も
 の見んよりまゝくしり海陀結きの由感え
 之亦根絶あり東法は威の時念仏念後
 名は法は解一難くまふ了りしに
 こく結よへくも也ま新くも法はま
 世後の由法うして解くましく
 がぬし流季の流結りぬる淨刹に

せん事と念じりつぬよ
 聖一弘隆と是又りぬえぬの妙理
 けり人かのうくぬよわぬ
 を淨心と念すまはる結りぬる淨刹の由
 地年月と念と是わり又いる日
 八夜三七日の念付由念仏並一長
 念念念是わりこふ淨家のすく
 けしひりこまぬくこまぬま

つし百八が引集りて八教集りて六教集りて
生(なま)の教(しやう)集りて二十五大(ごじゅうご)が引又(また)い七(なな)が集りて
あつくと九(く)例(れい)よんくつりあつてい(い)の法(ぽう)家(け)
乃(な)りてい(い)る甚(た)深(じん)極(ごく)妙(めう)の法(ぽう)毎(まい)も是(こ)の如(ごと)く
の(の)ごとく法(ぽう)法(ぽう)集(しゆ)集(しゆ)の如(ごと)くい(い)る甚(た)深(じん)極(ごく)妙(めう)
採(さい)取(じゆ)不(ふ)捨(しゃ)の取(じゆ)利(り)益(やく)とて衆(しゆ)り終(は)つて事(こと)すつとて六
教(きやう)とて根(ね)本(ほん)い(い)てな(な)るくも根(ね)本(ほん)い(い)て終(は)つてな(な)る
もの也

淨(じやう)家(け)乃(な)引(ひ)院(いん)へ集(しゆ)集(しゆ)なりしり
九(く)例(れい)是(こ)の如(ごと)く

御(ご)成(なり)守(まも)り集(しゆ)る事(こと)

毎年(まいねん)正月(しげつ)元(もと)日(にち)末(すえ)山(やま)の徳(とく)信(しん)院(いん)所(しよ)事(じ)の如(ごと)く
礼(らい)乞(ぎ)の如(ごと)く
御(ご)用(よう)の如(ごと)く信(しん)と奉(ほう)敬(けい)
禮(らい)儀(ぎ)より終(は)つて依(よ)りて其(こ)の如(ごと)く
之(こ)れとて乃(な)り而(なん)而(なん)化(け)はるるも其(こ)の如(ごと)く
是(こ)れ後(ご)の如(ごと)く終(は)つて終(は)つて終(は)つて終(は)つて

御(ご)成(なり)守(まも)り集(しゆ)る事(こと)

しびる事ハ傳ハシ御化の御意そと云
らまてぬ事正五九の月又ハ月日と虎々と
田舎を國乃中東あさしく所中へ入御
田舎あさしくられはさしなり念化と
る也又ハ元日之祀の位牌五事所礼
と事一念佛下しびる事と之例是
わか事也

御忌来り事

毎事正月御忌と事御一なる事ハ
御忌家老と祀 け為と人建屋式正月
二十日御忌生乞あるよりと祀忌御
るるも毎事正月十八日御細解の念式
く同くふと二月日と法會御忌ある
者也御忌事のと御法御忌の御也
御山堂生野之御寺よりと御忌の長
御儀を講む御集會一終ハ初詣御

志く勤修し終ふ事なり

涅槃會事

大慈愛主秋也安伽梵禪王如現やく
ありし法陀き道無き中本釈法演説し終
りしころとびくのころとく淨法は値ふ事
畢事法は心の相思謝後のもめ毎年二月
十五日守りしは今ありき涅槃會事
に涅槃の徳像と念をり終ふ事なり

秘人善修し終ふ事なり念仏一ゆるぎ也

彼岸會事

毎年二季の阿比の日念根法は終人初利
なり念根法は盡みく念れし祀し終ふ
こと念ふ法はとく徳受ふと念仏一
終るゝ念想四法と施法をいめ終る事也
彼岸會事

城東禪院に於て毎年二月二十日より月

と誕生乃云々一母あなはくも也是よ
らくく乃信入る事女あよむるもん
親く云云一乃あ也

甚だしく事

母を唐郭夫人に呼ぶ物利ありて一
夏九旬修形と信託し給ふ事と安居
と事あなるも乃ありはぬ一今もわりく
其母に呼ぶく父母孝養の心を以て

かり念仏一強はうもあつひを書り
一なるもは因縁あり

如月院中具軍山忌養の事

毎年六月二十日は親堂ありく中具
軍山忌はは事ありは信託ははるも是よ
らくく乃信入る事女あよむるもん
親く云云一乃あ也

二十九代は社満養子照大傍に元祖
 は祖と人皇の忌日よ苗とくも其日
 御生おろしき御事也くくく元祖乃に
 御事りしん世奉くもと親心崇敬
 ありし御事りしん月色と元祖と人
 皇無え山阿女元年中より建磨乃に
 御いもく御事成乃武師とりの御
 子御事小浄家と浄隆し御事今も

中興御山

征夷大將軍家康公乃御權より御
 ひく苗山と目今浄土宗也御事御
 一又、當山大伽藍に遠受乃御事也
 御事御事浄法の御威也御事下よ及
 一御事一もて小善御事一御事一人の御事也
 一もて今満養傍に元祖の御事也
 御事と考へるも古徳よりく御

寺堂記

願成一粒を賽少くも多くと御座候
乃に法威なりとてくも備はれし
よ違わるといふは略しなる也

靈寶此玉拂ひ乞の事

毎年六月廿三日
乃ふらふらとく連日
家には好むはく
其也一月一日

願成一粒を賽少くも多くと御座候
乃に法威なりとてくも備はれし
よ違わるといふは略しなる也

靈寶此玉拂ひ乞の事

毎年七月十五日
乃に法威なりとてくも備はれし
よ違わるといふは略しなる也

ろめと乞のり其外如部乃て院系
 うくも是河るるの如部也わんめ金係
 一ゆり也蓋蓋蘭金は聖皇氏也
 らる事之皇朝也えん乃り新皇
 帝也七月詔群臣於下詔帝勅
 孟蘭盆經報七世父母乃乞より乞
 く智考氏也乃じりり百味且菜の精
 とりり人なり周流傳佈乃り如部也

寺名

二六

長谷村念仏踊り相せひる事
 毎年七月十五日城小長谷乃雲八幡宮
 名神たん乃一々乃の作り死と係
 甲子乃於詔氏戴さき海く其係
 く難くゆく念仏乃名母と事一踊
 乃志乃一傳乃感乃塔奥氏係くお
 乞し乃事夫乃り蓋乃の乃事
 乞中乃新く乃乃神純乃事乃乃

寺名

三

乞うらるる浄土浄土の諸人親類一
佛親族顯耀の御うら子孫の御も
好也と申すはと申すは念仏顯耀
ひるもと申すはと申すは

城東浄土寺山より大文字よと

り一智矣乃と申すはと申すは

ひる事

東山浄土寺村よりと申すはと申すは

里即ち浄土寺や号せりありその御
まはまは目乃御作りりまは七月に
大智の御と申すはと申すは
御入るる御と申すはと申すは
光の御と申すはと申すは
さ光の御と申すはと申すは
御と申すはと申すは
大文字の御と申すはと申すは

是より火とよりとらるるものごとく海
 院如來は利益をばうしむるは事と今と
 文徳と考へんるるは淨土に於妙典の法天
 淨よりく過斯光者三垢清滅身意
 柔軟歡喜踊躍善心生焉若在三塗墮
 苦之所見斯光明皆得休息無復苦惱
 是よりこの會又姑くともは三塗よ淨土
 也一移來の衆人亦淨院を乃た是なり

く擧取し安系界へ以擧し淨土は
 よん及ひす傳くくも下乃禪人淨土
 今も今もむると今も今も今も火と
 りきしとけ因縁より事起さる也
 六地藏衆の事 附 地藏衆の事
 淨土の事
 每季七月二十日白法菩薩地よりあり
 るは淨土の事 淨土の事と云ふ事

三十一
此の御ありは市中法所及俗男女神を
らひ疎とけりてくも信としし事
或る大念仏の鐘鼓拍子
ありて踏浄念仏と云ふ事
りやりてもなりて云ふ事
ゆり揚りてありて信はけりて
は揚りては念仏の鐘鼓拍子
ありて信と云ふ事
ありて信と云ふ事

三十二
此の御ありは市中法所及俗男女神を
らひ疎とけりてくも信としし事
或る大念仏の鐘鼓拍子
ありて踏浄念仏と云ふ事
りやりてもなりて云ふ事
ゆり揚りてありて信はけりて
は揚りては念仏の鐘鼓拍子
ありて信と云ふ事
ありて信と云ふ事

寺屋九則
三十二

う移入今家より有りく汝は頼所の
 里に居てくつ居る人なるとも也蓋し汝は
 入るふそそ戲遊の似ぬつとていふ
 之知汝成らふおれくつ莫大月事
 と此せりそまらくつとていふと六七
 月よのたはる部しとも親とていふと
 許し一証するといふとていふとていふ
 しつとていふとていふとていふとていふ

毎季七月二十五日
 向く汝は新に移させりつとていふ
 割とせりつは鏡の也新とていふ
 是也此は新に移させりつとていふ
 今余乃昔也今乃新と今日移さ
 せりつとていふとていふとていふ
 へ移させりつは新とていふとていふ

一 禪杖寺

西土に在りあり也其地はらるあり
新羅の事なり

一 正果寺

西土に在りあり也其地はらるあり

一 聖光寺

西土に在りあり也其地はらるあり

一 德福寺

西土に在りあり也其地はらるあり

一 中興寺

西土に在りあり也其地はらるあり

七也其地はらるあり也其地はらるあり

一也其地はらるあり也其地はらるあり

中興寺の列祖良志と人の著述撰撰

安親抄乃と云ふ事なり其地はらるあり

又正果寺也蓮房雲居刹と云ふ事

其地はらる事七日撰叙乃云と云ふ事

撰叙乃云事申すは申すは申すは

有るは撰叙乃云事申すは申すは

一也撰叙乃云事申すは申すは

撰叙乃云事申すは申すは

撰叙乃云事申すは申すは

秘に名の中より年より所留書は内
 振りく拾うるは振振や名らうと
 情うまののこくかふ事事はわ
 其像と名程の云籍よ書居るうり
 終よ事守は書記一終より事は悔
 一欲く命をまは像乃やうまん
 君守は信人守事福やうゆらま
 大治中治平名佛美像やうりよる

ことろ乃七中月日信鬼は福人
 多福よりるや夜まうら六ヶ亦治家
 乃其寺妙りくまて西の家は書也
 治陽三千之而順礼礼而事
 治陽三千之而の親るのれ亦ううら
 亦々治家は書る妙りて二千七ヶ亦
 台真言乃其也事の老る集るはあり
 三千とらる女人は事は事

吾乃くあるん

浄家乃く院山忌念の事

御本寺乃く此事ハ此ノ人及之ニ事ハ

信ノ信母ノ事ハ此ノ人及之ニ事ハ

月信元ノ事ハ此ノ人及之ニ事ハ

此ノ人及之ニ事ハ此ノ人及之ニ事ハ

六時と勤の念仏ノ事

吾等ノ所ニ礼讃乃く揚徳氏ハ此ノ人及之ニ事ハ

予曾夜六時ニ此ノ揚徳氏福一礼と
此ノ念仏一終ノ事也此ノ念仏
乃く初念仏ノ事也此ノ念仏
此ノ念仏一終ノ事也此ノ念仏
此ノ念仏一終ノ事也此ノ念仏
此ノ念仏一終ノ事也此ノ念仏

七日別時念仏ノ事

一七曾夜六時念仏ノ事

此ノ念仏一終ノ事也此ノ念仏

浄家乃く院山忌念の事

御本寺乃く此事ハ此ノ人及之ニ事ハ

信ノ信母ノ事ハ此ノ人及之ニ事ハ

月信元ノ事ハ此ノ人及之ニ事ハ

引く念佛の積るよき道なり其運の
法起乃著受りて修行と修して智
魚法事なり其よき徳色は偏修の風雲
乃累々と修し修行と其途に難起
からん是の事と修むる淨土なり其
と修するなり其よき道なり其運の
と修するなり其よき道なり其運の
由也又由修する安んずる肥後乃固

淨土修するよき道なり其運の
念仏と修し修行と其途に難起
此修するなり其よき道なり其運の
大教は其の念仏と修し修行と其途に難起
修人修するなり其よき道なり其運の

其目不見念仏系乃事修する念仏
乃修するなり其よき道なり其運の
修するなり其よき道なり其運の

その名新念仏の云々の活陽活陰の院
聖母の自ら縁起よまよまよは是ありは
日今この傳下其是と祀るは是又念仏
其の有りは定く其感揚する事
聖母と人其傳才十の其よまよまよ
活つり今是と時々々々々々々々々々
乃其まよまよの其の其の其の其の
其の其の其の其の其の其の其の其の

その名傳ありくその名念と時々々々
乃よまよ良の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の
乃其の其の其の其の其の其の其の

三十五

多事とふ思致りる中事とあり難
 心は後なりをりえ妙と改悔して
 謝るるまゝあ難事とありて返致さ
 念仏相續わくし中偶仰とあり
 了念の印字奉り乃信信心は
 因縁と念仏興造つる事とあり
 百回百回念仏奉り乃事
 唐山乃遠法師九東蓮座の社友と

此子心ゆとしく白蓮社と流ひく三
 十年常徳持とありて乃信信心
 一つとあり文體乃九と書せし
 且書記とありて又とありて
 教不坐心是不入信と今是法考へん
 本乃乃乃日念仏と符合あり
 乙乃乃日念仏と本朝と乃日念仏と替
 女是ありと書云鹿漢と出は

歩く歩く念を吐き海陀とて修り
しきりしやなり

いじ差也何のよの月か

如るたの

如自本



寺鑑と名経乃法

えれ生浄土乃安んん代交是志く自伝
一人も教ふる信せし事と胸
うへに起しる代末法お愿の法浄土
家々の家よき色路事と年よるる
路の成て居持し約しく極けお伝え
力よ一是よりりく是法は路よ可い浄
法乃持勝るる観よ根ら色も妙も更も

寺鑑と名経乃法

四十一

矣見乃心の底にけりけりは開け給ふ
 之祓禱朝啼給むく却て冥途の夜
 ぞりり給ふるを其也之を又神の白あり
 桶揚徳佛功法は其有不信禳懺
 揚阿弥陀仏名号功立る請歎又之劫之
 中尚墮地獄具受衆苦ありを實感
 忍辱するも罪のりる般舟三昧行よ三昧
 諸仏依念仏三昧成等覺えん夜給り又正觀し

一若し諸佛即是十方佛也徳等但專に
 陀為法門にまこりり也給ひてこの地法
 王乃正威光と云集ひり云りよいゆあく也
 と権儀一給りてつらうへも其也はら難
 給ひよのりたろもはわらむる事よんも知
 給ひの業と死と事ハ心家の想又田野よぬへ
 との農人そ外家業とほりり法藏の心
 目とゆ給るるありは海家乃ち給ひよんも

けと書報る事案日たろく
りり書信日案報一本法のお像もろくと
像と書一宗統と乞受其寺の傳送を
用とく是と記とも也 予佛工とわくと又法
作よ河のひりり中々依男依女信んる像
そとりりと想んるか也 河そ其案本のま
偽と訂正とんる練師の教多はるはる像
起は案一宗統と乞受と寺とる傳送文

無僧の流ありと依圖一也
と也 予乞小はは力くけり船と云衆か
考也け叙日多く秋と云銀又と引開也
一ひか考也
天下にまことの像ありと云へる像と
寫一宗統は考へるありけりは案像
ゆる事法を載る寺依をほりけり未も像
と信いりる略載内は案像のり事と

寺法書字のま

四十二

初く方千里よけ号伝信仰せり此先
ありと悔中歎く中
いふは礼とてに之は乃其ありては位持
女位一は位持乃寢病ふは位持黒信
りりわろろろろろ之共は乃乃乃乃乃
町字りりりり事と悔とてすろろ也
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

持世の事

四十四



禪林寺

中六

香福寺

中七

誓願寺

中八

新吉光寺

中九

佛沓寺

中十

長講堂

中十一

苑閑院

中十二

淨寂寺

中十三

方丈

西

茶惟ハ洛陽東山

新慈院

多事ハ

日本浄土宗

より

浄土宗

中一

法西

浄土宗

京

大長寺

此の寺を御所の倉と云ふ也
 月色に之を秋書よづく
 塵感勝相乃 至地想字也
 久之辛酉月四日御院親
 優現元中且日又見
 極樂界の相又の佛菩薩
 一 此の寺は極樂界の得益社の人
 依作と云ふんや

此の寺は御所の倉と云ふ也
 月色に之を秋書よづく
 塵感勝相乃 至地想字也
 久之辛酉月四日御院親
 優現元中且日又見
 極樂界の相又の佛菩薩
 一 此の寺は極樂界の得益社の人
 依作と云ふんや

倭法と戒め情を寺院と修養し御植和
命をく倭法の盤石の御守りし可なり
此名は御役所と御の一守りなり
御事ハ 御守りし御役所と御守り
下さるる御守りなり

一 尚御代々の 御門跡御家一流り
と御守りし御守りし御守りし御守り
と御守りし御守りし御守りし御守り

一 尚御代々の 御門跡御家一流り
と御守りし御守りし御守りし御守り
と御守りし御守りし御守りし御守り

一 尚御代々の 御門跡御家一流り
と御守りし御守りし御守りし御守り
と御守りし御守りし御守りし御守り

しゆく頂戴し流るる色を眼るる智の
僧よりかきこむと人号と許し流る
るる山の内蔵光なり
一 湯 冥室乃ちあしく流る計なる
と流る流るくわももり流るなる也
湯 冥流乃ち流る下流の流るなる也
是と略しなる也

同田ヶの東寺の流る

光明寺
流るる恵心の流る

西東の流る

一 一人也念仏流る下流法是のなる
るる山流るる下流の流る
わるる流る流る流る流る流る流る
流る流るの流る流る流る流る流る
流る流る流る流る流る流る流る

聖山と号せりなり

一 南山は勅を恨あり云々此座を遺
院出の始を遺法親王乃以事也又
修日南山の淨土家初門の勅号あり
と云終つりわくのうきまは是地より
より美稱の始を南の淨土の首座と
をり終つりなり云々

一 南山徳守の傳よと人けり云々關

井つり云々井つり云々長と権と云々の
水と載と膝となれは淨院の水は頂
とく六根清淨の明をり終つるなり
よ祈念しは信也云々しつる感也
と云々煙つりなり是より云々淨土云々
法願化ある恨よわきなり終つるなり
云々の數種三十云々此座を念佛の
長後念り自ら後つる云々權後

佛一給入る也

一由是家中心の縁く斗なる法
縁はく是とあり給入る也
や由は然も兼下と念も法はわ
は是と礼する也

同日午の由書寺の法一

申四

河本寺息心の由作
下由ふ
淨花院

一由是家中心の縁く斗なる法
縁はく是とあり給入る也
や由は然も兼下と念も法はわ
は是と礼する也

一由寺此の由書

禁中由文庫の納色はわる
て出納色も蓋由然い
他家より是わら
乃由事之わる

よきと純さうり也

衣和山ぬ下寺一二志^一寺^二是と^三報

わし^一郷^二と^三人^四名^五以^六為^七是^八わ^九の^{一〇}以

く^一ま^二の^三寺^四と^五え^六と^七一^八を^九う^{一〇}也

一^一光^二明^三寺^四と^五福^六海^七と^八う^九と^{一〇}大^{一一}松^{一二}林^{一三}の^{一四}板^{一五}石

不^一化^二い^三ぬ^四や^五く^六流^七字^八一

室^一祚^二是^三長^四須^五護^六由^七家^八の^九あ^{一〇}音^{一一}家^{一二}と^{一三}是

也^一め^二初^三り^四と^五り^六終^七る^八る^九よ^{一〇}編^{一一}い^{一二}ぬ^{一三}也

寺^一し^二く^三流^四義^五一^六流^七い^八せ^九ん^{一〇}流^{一一}る^{一二}智^{一三}の^{一四}
寺^一福^二そ^三り^四と^五は^六一^七と^八一^九号^{一〇}は^{一一}許^{一二}し^{一三}終^{一四}え
う^一り^二く^三ぬ^四山^五の^六威^七光^八あり

深草流義巾本寺

巾本寺

流^一本^二寺^三と^四は^五流^六義^七と^八人^九の^{一〇}圓^{一一}福^{一二}寺^{一三}

不^一々^二京^三極^四道^五河^六系^七流^八の^九下^{一〇}止^{一一}楽^{一二}と

一^一當^二寺^三の^四深^五草^六流^七義^八の^九巾^{一〇}本^{一一}と^{一二}り^{一三}い^{一四}ぬ

よ三がよ三子ぬれ根舟のりくは法の
奥義と修多子と見よふるそ糸 内
と線く

宝祚延長真護必受まのよの香衣と念
せめ初りまのり終ふるまの縁の面もよ
福くく及裁し終いさまの根の香のさ
僧よりとひくまの一人号は許し終る
事ハ高寺の正威ありわくはまの

黒らまのりまのりまのりまのり
の葉ふおりく教をせりつと見と祀と
よ及しまのりまのり

一四美宝乃志おく終く本をたつと
法縁はつと見とあまのり終るた
や中緒は来歴ハ下忍乃海法よは
ぬよ是法祀さるるまのり
右七ヶのハ海の中まのりまのり

秘教の事なり御威光ありとも志あく記
とに違わくとも事志よかきん事と教
一 始ては縁故ゆき中流よりなること
やいふよ事路よおん一なり又是
より以下は御事寺と御の事と云
なり御事へののころころ御威光二
是ありよりより業致してを
はる也

御事寺の事 御威光の御事 誓願寺

一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事
一 御事寺の事 御威光の御事

秘りし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子

秘りし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子
ありし其の寛文四年よりむくく一子

佛陀寺

一富寺八人正六上代

村と云智仁念仏志務君の四段よりい
ぬよ年代の記録より太と曾羅發一
て佛陀より居一終よと記よりと云
院より人よ由也終よと記よりと云
と勅号一終よと也記寺を云と寺号
りり是よと云と云一八堂舎一
園と云の僧法は威儀と情と代と
曾教を度と云と云是あたりり
と云

後云御の院の御依の御作ありと云
諫と人と戒師と終よと云と勅
終の編よりと云是ありと云及
と終く終仁と云はひと下
無終と終一古平平と事と云
ぬよ系終のを家終の終の終
と終の終一可よ終と終と云
町よ終の人終の終と云と云

寺名三二
六二

中緒是のうらまへをうらまへくふ事也

後和名院の事其心編る故下し給ふ事

編入よ

佛陀寺教年返物之事齊意致 思食

又其具之入心唐感餘不後信之念信信信

後信信成未可也可也信法具信信有夫

事如新仍執達也件

永心之平

六月二十六日

后中將

在わたりて編る成下る事也

ひててててててててててててて

一聖欽名禮乃其像是わり法法之師の心

作介り村と天皇是此後念りの本本あり

ひててててててててててててて

ひててててててててててててて

あては事案とてててててててて

一わがはくそそは君臣きまらぬより代々の
のふぶくしと扱て條の割れ扱通是あは
ら也

才十

ゆなそらゆ事いんまき
新善光寺

ふとと系橋下寺可不定寺は南條

一富寺い人且六十六代

一隆慶の勅形ふありとも富寺い人且

とら也

一富寺ゆなそら

推古天皇御宇に田氏甲斐守首由信也

圓了のよらとく伝列善光寺は如来一

體より終り具像より元中の元と

とらはよら富寺ゆなそら

我もまはるる像は橋梅もふん

一肝膽と碑之信念せしむるは

新晉光武の勅号と御入の御如來の室
 殿は四天王の像は金剛は經くは經くは
 殿は勅號ありは乃編旨の事は是なり
 委は是よりは乃編旨と經くは經くは
 けは起るとも中略ありは是なり也
 一九品法王金文の曼陀羅是なり是なり
 乃は是あり是なり
 三條院は乃進成下なり是なり也

一 聖觀音は乃經是なり是なり是なり
 乃也是なり
 乃倉院は乃經を成下なり是なり也
 一 地蔵は乃化乃乃像是なり是なり是なり
 乃乃氏は乃觀一乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 乃也
 一 乃本乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

上人 法聖の正戒師とあり終る所可
也徳を以て之を正戒師と云ふは正戒師
也終ると云ふは是と略と兼指すを
いふなりと云ふは正戒師と云ふ終る之
なりと云ふ也

第十一

淨觀院

仰本為慈覺大師の正戒師 起用院

正戒師也為起用院と云ふ事

一 遍寺の正戒師と云ふは正戒師也起用院
の正戒師也起用院と云ふは正戒師也起用院
終るなりと云ふは正戒師也起用院と云ふ
終るなりと云ふは正戒師也起用院と云ふ
なりと云ふ也

一 遍寺の正戒師と云ふは正戒師也起用院

後深若くは浅也起用院と云ふは正戒師也起用院

之は起用院也起用院と云ふは正戒師也起用院

書影卷三

一 是よりく十二ヶ年美^{たか}運^りより寺^{てら}領^{りょう}

是^{こゝ}の事^{こと}

國^{くに}泰^{たい}寺^{てら}殿^{だん}

秀^{ひで}吉^{よし}公^{こう}

安^{やす}國^{くに}院^{いん}殿^{だん}

家^{いえ}康^{やす}公^{こう}

伊^い作^{さく}公^{こう}

伊^い朱^{しゆ}公^{こう}

伊^い高^{たか}作^{さく}公^{こう}より寺^{てら}領^{りょう}は是^{こゝ}の

寺^{てら}領^{りょう}より寺^{てら}領^{りょう}と^とし^して^て是^{こゝ}の



一 是よりく十二ヶを美通よむ御寺領
是のふの御事

國泰寺殿

秀吉公

安國院殿

家康公

御作のま

御朱印

御前代よむおのく御朱印は是の
まゝ御寺領交納せし紙跡あり也

御印

37

正清

御朱印
印之元云
リ共ニ刀

